歴史総合-DX

**2014年①（平成26）テロ組織IS・ウクライナ問題**

サウジアラビアの資産家の一族に生まれたウサマ・ビン・ラディンは、 1988年（昭和63）にイスラム系国際テロ組織「アルカイダ」を設立しその司令官となった。1990年（平成2） の湾岸戦争で、アメリカ軍がサウジアラビアの地に足を踏み入れ、サウジアラビアを拠点にイラク攻撃したことに「アラブの地を汚した」と憤慨して反米に強く傾き、その報復として2001年（平成13）9月11日のアメリカ同時多発テロ事件を首謀した。その直後の10 月には、アメリカ軍は、アフガニスタンのイスラム原理主義組織「タリバン」がウサマ・ビン・ラディンをかくまっているとして、アフガニスタンを空爆し、さらに首都カブールを制圧し、暫定政権が樹立された。2004年（平成 16）に、「アルカイダ」はイラクで日本人青年を人質にし、自衛隊のPKO部隊の撤退を要求したが拒否されたため人質を殺害、インターネット配信で世界に向けて報道した。2011年（平成23）5月に、10年ごしの大捜索により、アメリカ軍はパキスタンの首都近郊にいることを発見し、殺害したことで、2001年（平成13）以来続いたアメリカの対テロ戦争は一つの節目を迎えることとなった。その翌年の2012年（平成24） には、アルカイダ系スンニ派武装組織「イラク・イスラム国（ISI）」が設立され、さらにその2年後の2014年 （平成26）6月にISIを前身とする「アルカイダ」の下部組織としてテロ組織「IS」（イスラム国）が、シリア国内のラッカを首都に、カリフ制国家（イスラム教の預言者ムハンマドの代理人が統治する国家）を主張して建国宣言した。スンニ派イスラム教徒が多いマレーシア・インドネシアからも多くの若者がシリア・イラクに渡り、インターネットなどのネットワークを用いて兵士を募り、石油生産の接収・密輸・支配地域での徴税・身代金要求などでイラクとシリア にまたがる広大な土地を武力で領土を広げ、それまでイラク国内でのテロ活動だったものが、一気に世界中に拡散、「反米」が「反欧米社会」に進化し、さらには 「イスラム世界」VS「欧米キリスト教世界」に転化することとなった。アメリカ主導の有志連合軍の攻撃にもかかわらず、2015年（平成27）5月までにシリア領の過半を制圧したが、シリアを支援するロシアと、アメリ カ主導の有志連合軍がともにシリア国内で空爆を続け、シリア国内の内乱と「IS」攻撃の混乱で、大量のシリア難民が欧州に押し寄せることとなった。 また、ほぼ時を同じくするように、2014年（平成26）2月に親ロシア政権（ヤヌコビッチ政権）のウクライナ共和国で、EU加盟を目指すなど新欧米路線に転換する政変が勃発した。影響力維持を狙うロシアが介入して政府側とロシアは武装勢力との東西対立に発展し、旧ソ連の一員が新欧米路線に転換したことで、ロシアが介入し、武装勢力との東西対立に発展、9000人以上 の兵士・民間人が犠牲になった紛争の解決を目指し、ウクライナ・ロシア・ドイツ・フランスの4カ国の停戦合意で、2017年（平成29）に親ロシア政権は崩壊した が、3月には政治的対立で混乱するウクライナに、ロシアが介入してウクライナ南部のクリミア半島の併合 を宣言した。4月、さらにロシア系住民の多い東部で、親ロシア派が武力蜂起、ロシアが軍事支援したことで紛争（ウクライナ東部紛争）は激化し、東部の州を実効支配する親ロシア派に対し、政府軍（親欧米派）を支援する欧米各国が対ロ制裁を実施し、ウクライナ東部紛争は長期化することとなった。7月には同国東部で親 ロシア派のミサイルがマレーシア民間機を撃墜する悲劇も発生した。11月にG20サミットがオーストラリ アのブリスベンで開催され、「ウクライナ問題」が議題となり、欧米各国から非難を受けたプーチン大統領 は日程を切り上げて早々に帰国した。（翌2015年2月、フランス・ドイツの首脳が和平に動き、「ミンスク合意」が まとまり、東西冷戦の終結後の初の国際紛争となったウクライナ紛争は、2017年（平成29）にウクライナ東部をロシアが実効支配する状態で停戦となった）